

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720127

研究課題名(和文) 第一次世界大戦戦争文学におけるリアリズムの構造についての文体論的研究

研究課題名(英文) On the Realism in the First World War Literature - A Stylistic study

研究代表者

久保 昭博 (KUBO, Akihiro)

関西学院大学・文学部・准教授

研究者番号：60432324

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：1990年代以降、第一次世界大戦の文化的側面に着目した歴史家たちによって、「戦争文化」という概念が提唱され、戦闘員のみならず銃後で戦争を生き延びた人々の心性をも対象とした研究が展開された。この「戦争文化」の概念を文学の分析に援用した学際的研究である本研究は、戦中から戦後にかけての文学の生産と受容を、戦争遂行のために再編成された文化状況のなかに置き直すことで、大戦表象の生成過程を跡づけたと同時に、このような文化状況に直面した作家たちの反応を、具体的な例に則して明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Since the 1990s, the concept of "war culture" has been regarded as imperative among those historians who focused on the cultural aspects of the First World War such as the mentality of women and children of the belligerent powers. By incorporating this cultural approach into the analysis of the literary texts on the First World War, I have examined how the literary texts established the representations of the War taking the various reactions of writers and artistes into account.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：フランス文学 第一次世界大戦 戦争文学 記録文学 戦争文化

1. 研究開始当初の背景

第一次世界大戦開戦から百年が近づくにあたって、歴史学の分野での大戦研究が盛んになると同時に、文学・芸術研究においても大戦の文学史・芸術史的意義を再考する機運が生じてきた。こうした中、とりわけ 1990 年代以降の歴史学で主流となった文化史的アプローチを援用することによって、戦争の文学的表象に関する学際的な研究がこの機会に可能になると思われた。これが本研究を構想するにいたった動機である。以下、研究開始当初の学術的背景を具体的に記す。

(1) 第一次世界大戦の戦中から戦後にかけて、戦争を題材にした証言的・記録的な文学作品が大量に出現した。1929 年に出版され、現在の研究にも決定的な影響を与えているジャン＝ノルトン・クリュの『証言者』などのアンソロジーはその証左である。これらの作品は、大戦表象のリアリズムを構築したという観点から重要であると考えられるが、文学史にも名前を残す作家によって書かれたもの(アンリ・バルビュス『砲火』やルイ＝フェルディナン・セリーヌ『夜の果てへの旅』など)を除いてはほとんど研究されてこなかった。

(2) 1990 年代より大戦研究では文化史的なアプローチが盛んになり、その中で、アネット・ベッケルらによって「戦争文化」という概念が提唱された。これは兵士たちは当然のことながら、「銃後」の女性や子供も含めた当時の人々の「生の経験」を理解するための視座である。プロパガンダのあり方や、メディアにおける戦争表象、あるいは学校教育の変化など、戦争文化研究が明らかにしたことは多いが、なかでもいわゆる文学作品としては考えられることがない証言的な書き物について関心が払われたことは本研究にとって重要であった。こうした研究によって明らかにされたテキストを、文学作品と見なされるテキストと並べて学際的な観点から論ずることによって、戦争文学の「リアリズム」の構造をより総合的に理解できるのではないかと考えられた。

(3) 1990 年代はまた、第二次世界大戦時の強制収容所における経験などをめぐって、「証言」という言語のトポスが歴史学、文学、表象研究(映画など)を横断する重要な問題となった時期でもある。極限的体験の表象可能性(あるいは不可能性)や歴史叙述におけ

る当事者性の問題をめぐる議論、さらには歴史修正主義に関する論争など、第一次世界大戦期における証言についての研究にも参考となる研究成果が、本研究を始める時点においてかなりの程度蓄積されていた。

2. 研究の目的

以上のような背景をふまえ、本研究では、歴史学や社会学の知見も応用することで、戦中から戦後にかけて大量に出版された戦争文学がどのように戦争表象のリアリズムを確立し、戦争のイメージと記憶を形成するに至ったのか、あるいは、大衆社会に基盤を置き、支配的な表象体系としての位置を占めた「戦争文化」に対抗しようとした作家達は、いかなる戦略を用いて戦争を描き、語ったのかを明らかにすることを目的とした。

とはいえ本研究はあくまでも文学研究に立脚し、また文学作品と文学史に関する理解を刷新することを目指す言語による戦争表象(特に文学作品)の研究である。それゆえ研究対象としては特別の関心が払われたのは、戦争文学の「文体」ならびに「構造」である。文体や構造に着目したのは、そこに戦争文化を構成する様々なメディアの言語的要素が主題においてのみならず形式的側面においても現れているからであり、それらに対する作家の態度や戦略を明らかにすることができると考えられたからである。

具体的な調査対象となったのは、戦中から両大戦間期にかけて書かれた証言的・記録的な戦争文学、大戦時に流通した大衆的な読み物(文学作品、新聞、雑誌等)、戦争が作り出した特殊な言語状況(新兵器や兵隊組織の登場や植民地や地方からの動員等によって、塹壕ではクレオール的ともいふべき言語が生まれた)に対する関心から戦時中に出版された「兵士の俗語辞典」の類の三種類のコーパスである。これらの個別事例の調査・研究結果を踏まえた上で、それらを比較し、戦争文学における戦争表象のリアリズムの形成過程とその変遷とを多角的に描き出すことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の方法は、以下の四点に大別できる。(1)戦争文学作品を収集し、作品の背景を踏まえた上で、とりわけそれらの形式面に見られる特徴を分析する。

すでに述べたように、フランスでは 20 年来文化史的なアプローチによって第一次世界大戦研究が牽引されているということもあり、戦争文学の復刻や『14-18 年の大小説』

といった戦争文学のアンソロジー、さらには「無名の」人々によって書かれた手記や回想録が次々と出版されていたため、まずは入手しやすいこれらの資料の収集を行った。資料については購入可能なものは購入し、購入不可能なものに関しては、国内大学・研究機関で閲覧や複写を行った。また、プロパガンダ小説や流行小説など、購入も難しければ、日本国内の図書館・研究機関で閲覧することも不可能な資料については、フランス国立図書館などで現地調査を行い、閲覧や複写を行って資料の収集にあたった。

(2) 戦中・戦後にかけて出版された雑誌や新聞、大衆的読み物などを収集、分析し、「戦争文化」の実証的考察を行う。

これらの歴史的資料については、リプリント版で再版された新聞雑誌等、比較的アクセスしやすいものであれば、購入可能なものについては購入し、不可能なものについては学内図書館、国内の他大学・研究機関において閲覧・複写を行って収集した。またフランス国立図書館のオンラインデータベースサービスである Gallica は、数多くの文献や史料を公開しているので、これらデジタルアーカイブも活用して、インターネットを通じて資料の収集、分析を行った。それ以外のものについては、フランス国立図書館だけでなくソム地方ペロンヌにある「第一次世界大戦歴史博物館」をはじめとする各地の戦争資料館に赴き、現地にて資料収集を行った。また、研究代表者の前任校である京都大学人文科学研究所にて、1915年から1919年にかけて発行された大衆向け絵入り新聞である *A la baionnette* をまとめて購入することとなったため、その詳細な調査・分析を行うことができた。

(3) 「兵士の俗語」を実証的に調査検討、その受容を文化史、文学史的観点から考察すること。

兵士の俗語に関しては、(2) であげた新聞雑誌等の史料と同様の方法で一定程度の調査、収集をおこなったが、おりしもこの問題に関する包括的な研究書が2010年に出版されたため (Odile Roynette, *Les Mots des tranchées - l'invention d'une langue de guerre, 1914-1919*, Armand Colin, 2010)、この点についてはこの文献を主要参考文献とし、以下第四点についての調査を途中から導入した。

(4) 第三共和政下における初等・中等教育の普及と識字率の上昇という観点から、証言的文学の広がりや性質について考察すること。

そもそも証言・記録的なテキストが数多く生み出された背景には、大量の兵士が戦場に赴いたというだけでなく、彼らが「書く」ことを知っていなければならなかった。こうした観点から、第三共和政下の教育政策を検討し、識字率の上昇と愛国主義の涵養、また文

化規範創出の相関関係について考察した。

4. 研究成果

前述の研究方法にほぼ従って研究を遂行した。すなわち日本国内において資料収集ならびに検討と調査を行い、平均して年に一度の割合でフランスへ調査旅行に行った。訪問先は、フランス国立図書館ならびにパリ第三大学図書館、ペロンヌの第一次世界大戦歴史博物館、ヴェルダン市の戦争モニュメントならびに戦争博物館などである。また、2012年にはメス市のポンピドゥーセンターで開催されていた展覧会「1917年」を見学し、またこの展覧会に関連したシンポジウムに出席し、現在の文化史的大戦研究をリードしている代表的な研究者であるアネット・ベッケル氏ならびにニコラ・ボープレ氏らの知己を得た。ベッケル氏とは現在も連絡を取りつつ、2014年1月に京都大学で開催された国際シンポジウム「第一次世界大戦再考 100年後の日本で考える」の報告書翻訳などをともに進めている(2014年夏に公刊予定)。

他方、研究成果は積極的に国内外の学会やシンポジウムの報告として、また論文や書籍として発表した。以下、本研究の成果を下記「主な発表論文等」で挙げた項目に従って記す。(1)から(5)は論文、(6)と(7)はシンポジウム発表(論文として公刊予定)、(8)は図書である。

(1) 「第一次世界大戦小説における口語・俗語文体 アンリ・バルビュス『砲火』のリアリズムについての一考察」

第一次大戦小説の代表作として知られる『砲火』に用いられている口語・俗語文体を、戦時中のメディアによって作られた言語の状況と、口語に関心を寄せるようになっていた当時の言語学の潮流の中に置き直し、その射程を分析した論文である。同年度に日本フランス語・フランス文学会関西支部会で行った学会発表をもとにしている。

(2) « La Grande Guerre vue à travers des anecdotes : notes sur la première série d'*A la baionnette* »

第一次世界大戦勃発後に創刊された愛国主義的な絵入り週刊誌の分析である(京都大学人文科学研究所にて購入)。この論文では、この雑誌の第一期に刊行された号を分析し、戦争の初期に、当時進行中であった戦争についてどのようなイメージが作られていたかを、「敵の表象」など5つのテーマに即して検証した。

(3) 「後ろ向きの革命 ジャック・リヴィエールがみた前衛」

第一次大戦後に『新フランス評論』の編集長に就任したジャック・リヴィエールが書いたダダに関する二つの論考と、アントナン・アルトーとの間で交わされた往復書簡の分析を通じて、彼が主張した「古典主義」論を考察した論考である。戦争の直接的な表象の分

析ではないが、ひとりの前衛詩人と戦争直後のフランスを代表する文芸誌編集長との緊張関係をはらんだ交流を通じて、大戦が文学・芸術に与えた精神的な影響を明らかにした。

(4)「レーモン・クノーあるいは口語文体の『民主主義的美徳』」

2012年10月にソルボンヌ大学で開催された国際シンポジウム(« Processus de démocratisation et moment vernaculaire des littératures »)における発表の日本語版論文である。両大戦間期のフランスの詩人、小説家にみられた口語文体を積極的に導入する潮流を代表する作家のひとり、レーモン・クノーをとりあげ、彼の文体的実験の背景となった言語思想に、大戦と戦争文化がつくりだした文化的・言語的状況が存在することを明らかにした。

(5)「戦時のフィクション 第一次世界大戦期におけるフィクション使用をめぐって」

戦後にしばしば語られた「精神の動員解除」の一環として、子どもに戦争ごっこをさせてはならないというものがあった。「ごっこ遊び」というフィクションが「恐ろしい現実」に転化してしまうという怖れの分析から出発し、「戦争文化」はフィクションという遊戯的な精神活動を許容しないのではないかという仮説を検証するために、戦時中に出版された戦争小説や大衆娯楽雑誌などを比較、検討した論文である。

(6)« La haine de la fiction ? – A propos des Témoins de Jean Norton Cru »

第一次世界大戦の戦中から戦争直後にかけて書かれた数百の記録の戦争文学(手紙、回想録、日記、小説)を調べ上げ、それらを真正さという観点から評価したジャン・ノルトン・クリュの『証言者たち』(1929年)について、そこでは歴史叙述とフィクションという概念がどのように交差しているか、また、歴史叙述における美的な側面がどのように位置付けられているかを考察した発表である。

(7)「証言の誕生 第一次世界大戦戦争文学をめぐって」

第一次世界大戦は、日記、回想録、小説など、ジャンルをまたがる証言的な戦争文学を大量に生み出した。その背景には、戦争の長期化、人類がかつて経験したことのなかった規模の暴力という「事件性」に加え、第三共和政下の教育政策による識字率向上に伴って、新たに戦闘の主体となった「ポワリュ」と呼ばれる兵士が、自らの経験を語るべく筆を執るようになったという事情がある。「戦争の世紀」の幕開けであった第一次世界大戦は、また同時に、「証言の時代」の始まりでもあった。こうした観点から、戦中から戦争直後にかけて大いに流行した証言的文学が文学に与えた影響を、戦争文学をめぐる戦後の批評的言説の展開を軸として論じた発表である。

(8)『表象の傷 第一次世界大戦からみるフランス文学史』

第一次世界大戦の戦時中から戦後にかけて、人びとが戦争について抱いた表象の体系を指す「戦争文化」という観点から、大戦期フランスの文学状況と、その影響を概観した著作である。「レクチャーシリーズ」の一冊として、教科書としての側面も持っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

久保昭博「戦時のフィクション 第一次世界大戦期におけるフィクション使用をめぐって」、『言語態研究の現在』、査読無、七月堂、2014、pp. 231-248。

久保昭博「レーモン・クノーあるいは口語文体の『民主主義的美徳』」、『人文論究』、査読無、関西学院大学人文学会、第63巻、第4号、2014、pp.99-113。

久保昭博「後ろ向きの革命 ジャック・リヴィエールがみた前衛」、『New Partisan Review』、査読無、創刊号(塚原史編集・発行)、2011、pp. 4-27。

Akihiro KUBO, « La Grande Guerre vue à travers des anecdotes : notes sur la première série d'*A la baionnette* », in *ZINBUN*, 査読有、京都大学人文科学研究所、n.42., 2011, pp. 87-110。

久保昭博「第一次世界大戦小説における口語・俗語文体 アンリ・バルビュス『砲火』のリアリズムについての一考察」、『関西フランス語フランス文学』、第16号(日本フランス語フランス文学会関西支部)、査読有、2010、pp. 64-76。

[学会発表](計 4 件)

久保昭博「証言の誕生 第一次世界大戦戦争文学をめぐって」国際シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知(一橋大学大学院言語社会研究科、科学研究費補助金基盤研究(B)「生表象の動態構造 自伝・オートフィクション、ライフ・ライティング」)、一橋大学国立東キャンパス国際研究館4階大教室、2014年2月1~2日。

久保昭博「戦時のフィクション 第一次世界大戦時におけるフィクション使用をめぐって」シンポジウム「フィクションと出来事」(東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻)東京大学駒場キャンパス18号館、4階コラボレーションルーム2、2013年12月22日。

Akihiro KUBO, « Raymond Queneau ou les « vertus démocratiques » du roman parlant », Colloque international, « Processus de

démocratisation et moment vernaculaire des littératures » (Sorbonne, France), les 24-25 octobre 2012.

Akihiro KUBO, « La haine de la fiction ? – A propos des *Témoins* de Jean Norton Cru », Colloque franco-japonais « Comment la fiction fait histoire ? » (Université de Kyoto, Institut Franco-Japonais de Kansai), les 18-20 novembre, 2011.

〔図書〕(計 1 件)

久保昭博 『表象の傷 第一次世界大戦からみるフランス文学史』、人文書院、2011年、162 ページ。

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保 昭博 (KUBO, Akihiro)

関西学院大学・文学部・准教授

研究者番号：6 0 4 3 2 3 2 4